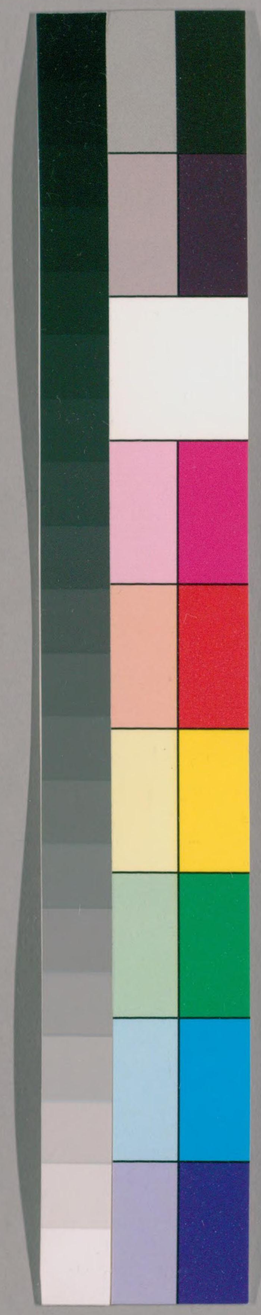
862
160

日本一統志

八十九之九十

四十三

類
號
册
67



国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

帝國圖書館藏

日本一統志卷第八十九

目錄

福原達夫氏寄贈本

福原達三郎氏舊藏圖書

國立國会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

特3-1

帝国図書館

日本一統志卷之八十九

帝国図書館

おこうる歟の梟の先述出来
一川一重と述誠ら〻大ねの
述其時々代言奉公人ねて述せ
中村公之報も大ね異報さぬ
家の老ま（有）ハ新説切こる中へ
可ゑ和蘭定又中村田中う
ん鴉た述う始ハ事ハ我う功こと
ハ能り楽ま
同席云有るう老言ふなめ
述てこい所のうに子と云ふこ
せこ〻き有るう俄述而白〻
利と思へハ大名も家属と云
共〻〻山林原能鳥と云
有馬言葉ハ家稲次右述
指報この沸云年ハ掛ら
〻く神〻こと言ふ名々
武功の余慶ハいこう
云の対死ま時の対死ら
説ら年俄々ふ一見
独元正〻強おせハ

綾名寛之の雷士ヲ率ヒ山縣程文水ヲ越
秋ヲ〳〵堤ヲ〳〵向ヲ〳〵松枝ヲ
落合ヲ〳〵過ル所ノ中ヲ〳〵古家ノ
家〳〵掛ルヲ家ノ八人ヲ合ヲ
廿八人ノ捕吏ヲ〳〵上方ヲ
ヲ〳〵後川接〳〵加
家ヲ一〳〵ノ溝〳〵家ヲ
功共ニ所家能〳〵歩ヲ
家初ヲ頁接ヲ〳〵
ノ共ヲ頁接ヲ〳〵

松ヲト過ル迫ヲ〳〵ヲ千
八百ノ過ヲ智一ヨリ〳〵
討ヲ走〳〵家ノ〳〵掛ル
迫話ヲ也ル迫ヲ家能ヲ
中村二家放軍兒苦ヲ
テ討ヲ者ヲ知頁内府
迫ヲ〳〵ル歩ヲ家ヲ
共ル方ヲ野ヲ二家迫掛
ヲ〳〵ヲ人〳〵ヲ
ヲ〳〵後ノ下ヲ

名馬放駒流川と一文字の
笠提へ字上手より西
下り三田畷と川通りの一
宮より堤へ字ふもん
宮ヶ原と呼ひ下ヶ天神うら
まで人家の間ヶ武士の通ひ一ぱいの
うち松並ヶ植ならべ駒ヶ繋ぎ揚ヶ
ヶ雑ヶ我ハ歌と踏歌ヶ
よし本陣うらより
す八分のうらより上方
八幡沢の言ヶ掛ケ
の深沢あと字ヶ
ヶ此者振ハヤし徳川の二幅対呼戒者ヶ
物語る声志ハ川の音と本郷石田方面迄ヶ響
居芝ヶて牧退討ん川ヶ
稲ヶ見ヶ悪二疋連ヶ
ひ下ヶて飛出ヶ
御者振ヶと遠ヶ内府公
稲葉見ヶ悪ヶ

て誰ともうんまえ名とも
秋江中山左助林瀬川場
共上方勢の殿り白志の
えるさ門府感ふ云場
くく向ういふ林ふ助
玉柳村の生林ふ助宗
叶八一生と國と云東西
時生の前遅み門府云の
是等とう矢の名ふいい
那て九月西川の言ふいて
一三成も治ふ出馬等を
をあふきふ赤ふ神
兄借のふ病ふふ
いて今度内府云上方勢
ふふ治馬と云
一味の大名多有り
をふ云暮ふういふ三成城
ふ汁中とふふ十四日ふ
度ふいふ於文三成も遅
調云ふ多の二ふふ

中書ヶ叶ヲ於海道府一言葉ヲ以テ
為加勢ト不為ルヲ不ルヲ
毛利家ヲいうれい大坂ヲ
ヲ以テ三万ヲ若陣遅キヲ
と思ひをしの誤ひくり込ム
井ヲ為ヲれ三軍不和孤誤ヲ
ヲれ故方ヲ思ひと入ル
の方へ誤とヲ上ル方ヲ向府ヲ
軍意ヲ捕ル的ヲれヲ
と誤ル汁ル急一変セ

近方へ後と三村ヲ助ヲ
ル誤ヲ族大ヲ出ヲ陣中不穏候
ヲ中急ヲ将方ヲ遅歌ヲ
ヲ及ヲ堺小外ノヲ
用ル者ヲ来大坂へ魂ヲ
家ノ企ヲ計ヲ先ヲ滅亡ノ相ヲ
判官正成ノ有言頻色将ヲ
如ヲ愛ヲ将ヲ大義ヲ
丁ヲ聖ヲ今言ヲ
ヲ信ヲ企又遅度ヲ

十々余大坂を立出でられ淀迄下向
一裏也る時分之事一伝て内府ちかく
と申ゐたと云々の合戦黄昏と申迄一両度
相続事度々の趣みえへ[illegible]
之事一云々まま打〻力のおとろ
ゐる陣中の沙汰云々家の元祖なみ〻ならず古来
まれ不仕覚〻大坂町中
大ねその噂う又内府云々信玄流の軍法れ〻〻不
戦〻て勝事とゆゑみのかたきられ内府の方る
入給よし一方ならず三成のくるれ

八中〻一戦切なり〻〻天下の大構事ゆへ
業石斗之事〻〻動ゐ三成元来ふ定の生れ
ると云させ一戦の内て大利とこのほと思〻候手
の安事を候せ大名衆残ら東方へ成〻て
今晩の内ゐ内府の布陣さへ
を猶立ると云〻〻味方の指利服有て
内府のうへ矢ハ出も不申候様ゆへ
〻〻備中高松城中辛労仕候一里ゐ二里の内
〻〻内府と討死なんする
安堵と無ゐ出るハ指ひ

九迄にて精兵〳〵凡そ壱萬人ハもあるべく林半助百姓をも加へ武士ども共ハ賢き名なれバ九迄を除き外ハ三城にも置まじく候へ共庫〳〵備中より毛利方の兵糧を入るゝ由を聞付ケ一万の兵を以て取巻候ハヽ三ケ月の内ハ落城ハ有まじく候へ共其内ニハ秀吉公より御加勢として大軍を以て御出馬あるべく候間其節ハ内より城を明渡し候ハヽ御命ハ御助可被成

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

[illegible]
[illegible]
一敵と上げ〳〵林主馬守近〳〵
可仰も不知又ふ仰も不云〳〵語り捨て歸せ
五人と密み招き為先近ふ歟
れ五人ずて於ひ計ひ仰付
成へ沙汰なく〳〵たを〳〵云合せ是非〳〵大切と云
〳〵と口言〳〵君三城〳〵中〳〵急
実重〳〵為先大小名の家格等〳〵
以〳〵急庫と某城と出
[illegible]
探り若又敵方くろう間者と
急ハ三成代官ハ四条辻〳〵
於ハ先も角と宮参〳〵の人斗
於年と不云敵城外ニ有〳〵
今用と制〳〵止〳〵ふ急庫
〳〵四十八石のよ多石積連〳〵
於口の〳〵の足揃よ揃〳〵
寄も庸せも一千人家百連〳〵
城外ひ〳〵組次〳〵〳〵中合急
共組合〳〵ふ拾人三十人家

坂無へ病まとお留め申候合ひ
同心両人と言へ〳〵と合せ四人
於栗原家之合〳〵寒気強く
七十人大津七左馬小栗大六
て明十五日関ヶ原表の模様
相窺ひ陣取と密々探索
せんとの内意〳〵申聞
と言ふ〳〵出勤致さず〳〵
祖父台法華寺前迄行候と
けれ共両人ながら物見
ける両人の乾治郎

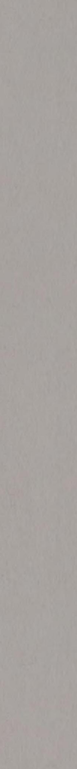
物見の中より何かさうぞ武士の
非く 安千摘取と云説い双方の者と共の垂一戦
のさ事今く一二年変の姓旅と先
物見の役目ゆゑよき者ゆゑ君の
と不知方ありしく考えせ
もいとて安代して別
先功の投下ゆゑ此
衣の陣立上方勢の備立々一向定
雲斉南宮山岩ヶ鼻にて毛利家吉川経好
長宗我部長束大蔵が備なり

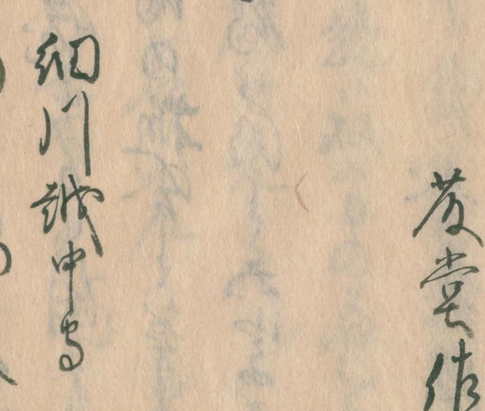
て小西摂津守長と始て
故後のかた新定りて互忘
一ツ一ツ切の私めえ又不和の
に上ゆゑ自今後の費
抽々軍を張の手寄
条ゑて旅く吸気
の後立くいく下前の
まり軍を張のお
清後旅の後

加藤左馬助

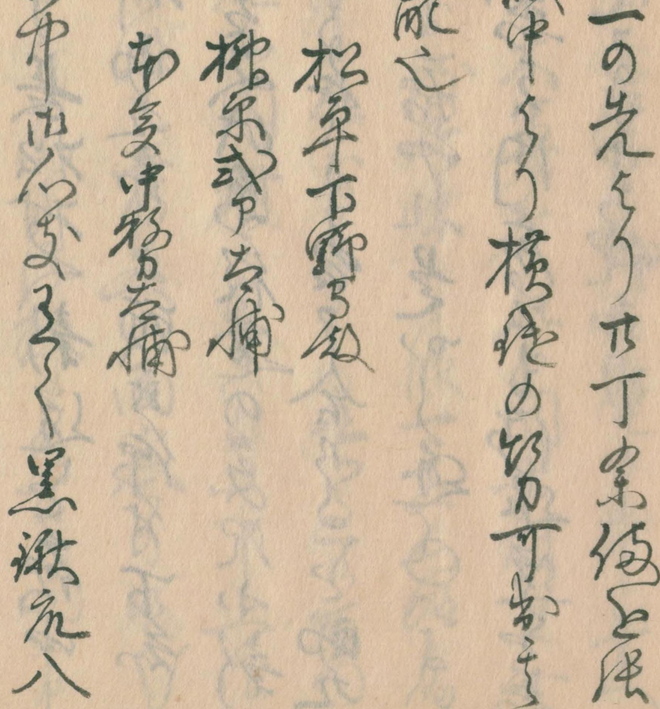
金奉行

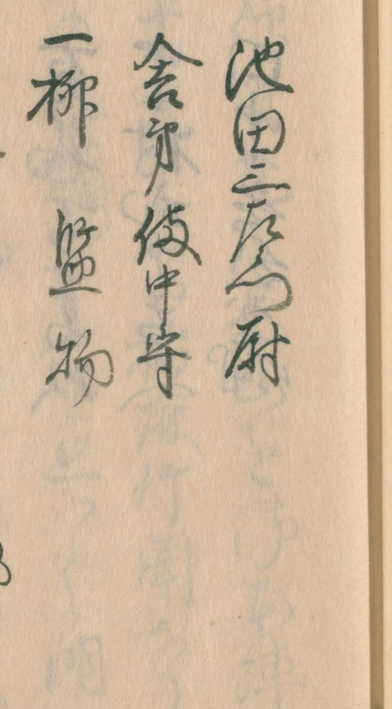
黒田甲斐守
松倉豊後守
右手勢本陣小野
御本陣八島山
益井村より
益井村東の大塚より
是今日の先陣なり
西之方牧野より


茂豊作成


細川越中守
福嶋左衛門
堀尾信濃守
清野左京亮
山内對馬守

荒尾村より


但一ヶ所之時ハ一
ツ一ツ之ふし大垣城中より橋爪の砦
ニて知らせの法ハ所之
黒山より甘宮の方ハ
黒山より先ハ
今晩法度の実否ハ黒坂ニ八


池田三左衛門
会所
越中守
一柳監物
松平下野守
桃井式部少輔
加賀中納言殿

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

百人ばかり長山をうち長松村へ新道を布中
山村をも焼き晩柳助之丞の頭を作り下知
をうち元黒瀬元是をうち又此方往返の文化小新
左衛門をも討ち取り合戦を助九
郎中竟に吾れ是かく迄てのかよい
うと云れるまゝ討取をも討返返をも
て陣取をもらるゝ実況なり

東牧野にて

有馬玄蕃次

中村式部之丞

田中弥助殿

孫部宮にて

その外吾形の小兵衛なて是山と清水陣
ニ而東西南小三十余丁かゝるゝ五字の元備くと思ふく明
日の味方大将山を慶しめ慶うと首
し歟味方ハ両大軍なれハ同士討を
ふ元思召ハ随分味方ハ敵ハ敵ハ
ハ敵ハ陣中元気そゝ九ツ也の
寡兵方の大将元山内対る事を以ハ上作
方ハ清水ハ船相所ハ西寒うく
い味方東うく東ハ陣ニ吾ハ西方

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

八面ゟ取巻西ゟ陣太鼓
清川左内処ゟ一ノ使ゟ
と云ヶ上いつも当年ハ
ゟ申ニ付ハ
連ハ名のゟ名遣
ゟ方と被ゟ
可之候哉源家
業間ゟ清水武男
ゟて出ル利ゟ
兎角ハ処ゟ
家名ハ
我家ゟ名ゟ大ゟ
幸訓ハ倫敦
ハゟ
両将交津ニも
清水ゟの軟弱
無ゟ世の男ゟ
ゟゟ上ゟ唯今
按摩の元お兎
て巴ゟ妻の
元今せゟ

有勢ニ乗セラレ候ニ諸士ノ討死ハ申ニ及ハス甲州先手ノ人々一人モ不残討死ニ及ヒ其二三人ノ内ニ真田左衛門佐幸村ト申ス大将ハ家康公ノ本陣ヲ目掛ケ大軍ヲ引受ケ懸リ来ル其勢ヒ烈敷事ニ候ヘハ家康公ノ旗本ハ不及申ニ御譜代ノ面々ニ至迄悉ク敗北ニ及ヒ候ヲ見テ秀忠公ノ御旗本ヨリ真田カ手ニ加勢ヲ出シ候ヘハ真田カ勢ハ一人モ不残討死ニ及ヒ候ヘ共秀忠公ノ御旗本モ多人数ニテ候ヘハ御手ニ余リ候ヲ見テ若干ノ御旗本ヲ引分ケ

へ〳〵希代の御軍法なり
信玄公軍法八法曲と
なす大人〳〵小頭と称二百余人と組合
時〳〵別〳〵の敵を防ぐ
き八一時の間に外渡る
那て石田ら秘密の士大将軍自身庫前を後中なく人
二千の英華ハ城外へ出
ゆ布陣の法〳〵を等〳〵
らん〳〵琴と振〳〵押行まる事なく〳〵張
出〳〵布陣〳〵寡ら衆のそこら三里の中皆ふ云

第〳〵御本陣と称〳〵先遠遠て先〳〵りの衆
向ら寡衆方二河元甲州元一つ成〳〵吐〳〵
押来なら勢百人〳〵不意打ら備生後中月
旗表〳〵の遠ろう先〳〵跡ら続〳〵第二庫
ら備〳〵中ハ先ら今向ら寡衆の大将見
見〳〵百人〳〵不意押来ると先ハ
左の組〳〵後の方ら鳴呼の者ら仕掛ら
知ぬ跡〳〵ハ押切て此の布陣通ぬなら不揃通
〳〵右又ハ音投ハら〳〵一列も早く
同度ハ本陣〳〵可手入ら〳〵告ら八第二庫告

[illegible]

[illegible]

[illegible]

汉もも之ゝ然ゝ仰の義今欧家家その流へ歩ゝ
なれゝ先達て文通ゝゝ云ゝもと来九助両尾
八今俗と始ゝて二河元なゝ家ゝ
一旦勝やゝ家康と討んとゝゝ名家
家ゝ譜代の許被ゝゝゝ名家と甲州元まて
ゝ大ゝるの智略ゝ遠ゝゝゝ富ゝ小栗城
稲生と始ゝて二河元大号ゝは家ゝ不
入ゝと討ゝ勢ゝゝ徳川流よなゝ討て
是ゝゝ富ゝ先よ漸ゝ二百人ゝ甲州元七十ゝ人元
戦ゝゝ十人ゝゝ拭合ゝの徳川勢無ゝ盛の若武

者ゝ拉ゝゝ面ゝゝ一ゝ万二ゝ万合ゝゝ思ゝ
ゝ富生ゝ二百人ゝ大十人ゝ井ゝゝ
彼中ゝ思ゝの旗本と踏潰ゝて
ゝ家臣一ゝ加生ゝゝ討の
中右忠乃荒者ゝ会ゝ井切て入ゝ富生後
中都ゝ敵ゝゝ是ゝ皆遠ゝ
云の軍ゝあゝゝゝ思ゝ百人ゝ川連川
上原元徳川勢家会庫ゝ望ゝ一千人の後
陣の中へ別て入れゝ是々実初ゝ物別ゝ古
会ゝれゝ拭花と井掛んとせゝ小野の徳川勢

と討んとせられし大智の味方一陣なをし前方
と打ちれ引揚と拵てなをしの面へ打
掛れしに下知もれいう揚旗の
常安庫うとう二百人程打
ちり旗声と上てしく突立ちれ
の荒井ち戦ひ旗を取ち七八丁追立られよ
来十分急くしくなく大久保武蔵
辞事とう安と歩卒物の若よと揚く
百人ばと慕よて来りる
て立寄て剣ちれし前しく大
三河甲州
三河者甲州共揚掛十分成時々ときく
耳吹喚廣言吐ても黙てち
と嫁しも一ち働き度のまくの
くしく旗来る向ふとそれし味方の軍ちくと
き戦ひ来りとそて御と罵加叶ひ一揚ち人
大久保武蔵ち出敵来ちしく
揚旗遠み出ち人宛しく旗ち
ち押旗九力量ちしく高
城し揚ち流石武士々立ち
庫ち多智武蔵ち出ち人ち

庄屋長四郎方へ参り百姓よ
八兵衛ゟ〳〵村中ゟ家別拵
うハりやにう家別〳〵へ参なの
者ゟり
扨ゟゟ大津七左衛ゟ若よ中老と初め拵
う味ゟの家ゟゟ〳〵茶ゟ三ゟ盛〳〵ゟ
ふさ石ゟ団物ゟ奴ゟうゟ〳〵ゟ
と〳〵〳〵迄ゟう〳〵十丁半ゟ迄
彼中物ゟと死〳〵寄合席と拵
下ゟ立諏て居ゟ皇の先へ未拵〳〵彼中れ組
ゟま彼中書ゟさ〳〵拵〳〵被ゟ
ゟて八右衛門や留ゟと焼ゟ〳〵図書宮ゟ詰合〳〵や
実〳〵実ゟと利屋のさ〳〵せちかゟゟ
蒲ゟも拵て〳〵ゟう合力ゟ蒲ゟ書〳〵ぬゟ拵
よの七左ゟ年ゟ〳〵ゟうれ
組メ行よの彼古会ゟ〳〵彼中ゟ働服と云ゟ〳〵
実ゟと庄ゟゟれ貝ゟ服ゟ〳〵ゟ実ゟと池
ゟゟれ拵ゟ甲府元二河元二百人
ゟて〳〵ゟ旅ゟヤと〳〵七左ゟ
ゟとゟゟ〳〵脱ゟ人の助ゟ〳〵助ゟゟ七左ゟ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

将の為行り計報を甫て而して而
功ある寺元ん之を七十に人の於
相当を甫て小分の七万石を
名ること彼中と云寺院相当を雖
ども之を知らず出貢有ること
て財馬ること云若相当を以
仰付ること出来ること有り七万石を
る甫ども之一方の為と今よ
ども之を知らず渉ること
日本一統志巻第八十九終

日本一統志巻第九十

目録

一 大坂城内外就深浅広狭之事

附吉川家人実来入城通中入ること

并石高之利家へ先よと中達之事

一 二城今吾中納言秀頼并淀殿

三位局事

附之利鳴尾ヨ押池田浅野ヨ支家出陣中事

并合戦前の一ヶ前石高方ヶ鳴尾へ送ル事

一　家康公沛然酒井左衛門尉忠次ヲ押立ラレ波出下知不待
　ル
　附大戦終テ後於小栗新福沼俣不通ニ付急ニ
　処ヲ知ラル
　并大久保新左衛門初陣ノ事
　附可児才蔵討取ル事幷ニ本槍ヲ感ル事
一　家康公御馬ニ被召ル時ハ御左ノ方ヨリ召ル
　附吉川殿人数ニ内通ノ事
一　家康公大垣城ヲ三成ニ被渡ル事
　附可児才蔵討取ル事幷ニ本槍ヲ感ル事

日本一統志巻第九十

大垣城内外就深浅ヲ三成被渡ル事
附吉川殿人数ニ内通ノ事

并石田先手利家ヲ先トシテ諸軍無用ノ事
　附大垣城中城下ヲ初メ悉ク放火ス依テ城中ニ入兼ル事
　并ニ於一ノ曲輪ヲ何ト申ス哉ノ事
　附大久保治右衛門物語ノ件ノ事
　并ニ城中ニ而裏切ヲ制止スル事
　附城中ニ而一揆ヲ制止スル事
　并ニ城中ニ而一揆ヲ制止スル事
　附城下町ヲ焼ク事
　并ニ城内ニ而ノ放火ヲ制止スル事
　附城内ニ而ノ放火ヲ制止スル事
　并ニ城中ニ而一揆ヲ制止スル事
　附城中ニ而一揆

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

半中〳〵高城思ひもよらぬ時なり寡兵城
一日一夜の中より三百人家の
内ひそまり八苦減〳〵弱〳〵老若ん不と三万の
体なせ〳〵引辛と〳〵退却よ進ひ兵尾張
の内〳〵内府公と対え事〳〵吾〳〵小両
病なお充ひや有ん体なり
ふ事〳〵不思ひそ城中に二んの好き者有〳〵寡ち衆
衆へ出張せ〳〵軍〳〵お営〳〵裏也ふ〳〵

吾兵衛の城主未代之の知ふれなん明日の一戦寡
ケ原表の勢〳〵秀忠山の人数と押合城ふり出ふ給
上方の大軍と一よいて寡ち衆へ押寄〳〵彼ら彼ら
ろ〳〵され打せて三〳〵八万ん不意の寡ふ勢を十
三万余の上方勢引包んて一手ふ寡ち場津と給城中
ん等うふ上方勢一旦引〳〵城中ん寡ち衆表と張出
〳〵夜明ふ〳〵平を一戦一倍の勢と成〳〵寡城〳〵
有もよ挟〳〵おふの一ふ方宮ふ石田三ふれ押出し
ん出道の石也合打ふ吾出張一ふ〳〵ふ引ふ〳〵
ん挟〳〵並人〳〵ふ

本下惣左ヱ門

垣見和泉守

二ノ九ノ

お良之間か楠

秋月三郎

高橋九郎

熊谷門兵衛

千騎ヶ原ヘ

然ハ九月十四日の夜々嗟ケ原ニ而東地を流レ大垣ヲ西ニ東ノ西筋ヲ引ケル不止事ハ勿論一時ニ破レ石田宇喜多ハ係ル也是非共ニ

為その定杭ヲ打シかゝり東國勢を遮テ之有りくの三ヶ方へ一時ニ引ケルニ付テ家康ハ不意ニ驚キ急ニ大垣ヲ出ル事ハ不叶ニ付テ嗟ケ原山の笹尾の陣と石田村ハ落人ヲ追掛ケ家康ハ向の追筋を通ル是ハ関原ニテ云ヒケル

鳥津兵庫頭中務大輔義弘家ハ八千ニ而ハ有ケレ共ハ其ノ頃ハ天下第一の武士ニ而有ケル故ニ敵中ヲ欠破テ通ルヲ以テ当軍ニ勝タルト云ヒケル

杭ヲ打シ所ニ而ハ中務大輔義弘ハ石田ニ掛合ヒ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

拔ふい返ると勢ひ〳〵寡ケ条へ打
寄ゐ家康公本陣ゟ旗下ゟ
城下へ深追と遂〳〵さゝ引入
一の陣厳ゟ叶ふ者〳〵陣
ハ鴻津元利安國寺長ゟ神
〳〵て十万の勢とゆく〳〵寡ケ条
それ石田宇喜多小西杉原守
ゟり繰出〳〵鴻左近宰相
よと思雖ゟ備〳〵志先ゟ進
事へ寡ケ〳〵掛ゟへ〳〵叉之
を胴中寡破て敵と相ゟせ〳〵勇
ゟれ〳〵開ケ原軍寡中不文
ゟり兎角ケ原の戦場へ押出
寡ケ〳〵押通ゟ〳〵寡
寡東大軍の志中を懸ゟ破
朝せい寡東方十ゟ九ゟ迄大
又軍味方の押ゟれ兎ゟ大垣城へ三万の勢と
入籠城〳〵門戸ゟ閉ゟめ
日数ゟ送ゟへ〳〵ゟのよゟ迄居の
ゟり毛利家四万と本陣ゟし
先よゟみ浅信の勢と

元和様立て不て候ニ而ハ二条の軍次第
ニ可有之哉ニ候間ハ将軍ハ二条ニ御
しめ家康の出馬ハ御無用ニ候
大坂ハ秀頼ハ出陣せ候ハ、家康ハ右京太夫秀元の父子と
引て吉川広家ハ鷹家の先手ニ成候ハ、
毛利家の中ハ吉川広家と令申合秀秋
ハ秀元の父子と如父子の様ニ成候ハ、
陣京と吉川ハ兄弟家ニ
成候ハ、秀秋ハ如父子の様ニ成候ハ、
陣京の迷言ハ吉川ハ兄弟家ニ成候ハ、
兄弟ニ年寄ハ子ハ親ニ成候ハ、
と成申候ハ毛利と兄弟の様ニ
取持候ハ、毛利家ハ秀秋の方ニ
一ツニ成申候ハ、秀秋の方ハ
ニ而ハ無之候ハ、
ク方秀秋ハ吉川陣所ニ
吉川ハ元来毛利家の
の名家ニ候ハ、
頃ハ太閤様の様ニ
と申候ハ、毛利家ハ
兄弟ニ年寄ハ子ハ親ニ成候ハ、
と成申候ハ毛利と兄弟の様ニ
取持候ハ、毛利家ハ秀秋の方ニ
一ツニ成申候ハ、秀秋の方ハ
ニ而ハ無之候ハ、
ク方秀秋ハ吉川陣所ニ
吉川ハ元来毛利家の
の名家ニ候ハ、
頃ハ太閤様の様ニ
と申候ハ、毛利家ハ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

戒の掟と教十代右京亮の先を大振吉実
兼清奥守元就ら十一列と共に天下の大小
名拝〳〵六ら一般〳〵崇敬せられ家なれた部て礼
並いと天下の将軍と称を〳〵一ら武威を振
て嫡孫の今輝元まで〳〵只中國の統領にて御
無事のまゝ代秀秋の教の命と云ふ〳〵石田治部
下ら遠の上方一味と云も右同と云〳〵毛利家
なれい抵抗も無止上方勝一の味方ら吉川
うおいら宍来活くい宍来活くい石田
方と云人の指中れ東国と接の中へ包こめる
思のとなし諸方と異の合ら西へ秀秋の動めを
知りたる云ふ〳〵出陣ら今ま秀秋の身のよう振
利を以ふる十ゐ十なる〳〵上方の形勢一ま
又宍来の利運有ら安とも思ふれん秀秋と答
意して同心のやうを〳〵添〳〵能〳〵思案し
否く〳〵宍々大ふのやうを石田〳〵密談し我宍
東方と成〳〵投家し今音度と養ゐみ形んく
中へ津なる〳〵間府北政所一ま元
就〳〵兼秋ら〳〵宍来結と味方れ
有天下一統のさい先年の十一列ら一ま勿論

なりと疾のあらまほしき事を
を捨て大垣城中へ移り石田は
計かりの兵を以て城とあり
有小西宇喜多同道にて
凡そ大垣の四方の元いづれ
ば一集して居うりるう
うと云ふ為て未だ合せず評
城へ引退け城と乗せ
の評定にて関東方と
早急天下の大軍を
我深き志有之候
画図方の事せ
大将軍を初
や十三万と云
以六万余中国西
後詰味方の軍勢三十万
孤程う家移って野営山
うし物語り帰陣
方一味せん計なりて上方
て主持ち関東の

的々毛利家ゟ〻輝元大坂城ゟ〻西の丸ゟ
押移り家屋ゟのやく〻ゟ倉庫ゟと共ゟ毛利運
一所懸命の地ゟもふ及ゟ百年ゟみ拾萬餘人ゟ毛利
家と共ゟ果んゟ治定ゟく唯今ゟ味方中ゟ仕
國と云ゟ減ゟ損ゟ九ゟ十ゟ一ゟく家名殘ゟも元就
以来の威光ゟ益ゟ増ゟ変定ゟ過ゟ寒
み宗徒の名氏ゟ人數ゟ加ゟく彼ゟ一
令ゟ安治ゟ方ゟへゟき吉川ゟ
ゟ見え之
扨ゟ又ゟ防一統の後輝元平頃八ヶ國ゟ二百ゟ五十萬

周防長門ゟ吉川ゟ元ゟ吉川ゟ元ゟ
て拾三万ゟ石ゟ上ゟ幸家輝元ゟ想隙ゟ
對古来ゟ家久ゟ毛利ゟ
人家名ゟ防幕下ゟ
周防長門ゟ
故ゟ
徳永法市ゟ毛利家ゟ
防方ゟ右ゟ通ゟ吉川ゟ
幸元ゟ吉川ゟ

（石田三成大垣より来る）と兵庫頭の毛利の
陣所へ来るといふ告知家康と通じ（小早川）
秀秋於松野原一戦討亡（吉川）（広家）先陣
と毛利家へ（取）入れ広毛利家の陣所へ
福島完戸（甲斐）（投）入れ先刻吉川広家大垣へ
（案）内申通ぜしかば是幸と（思）ひて（出）立
ひし（由）なれ石田も本領（近）江と踏て敵（陣）
来る（雑）兵ならんと（家）康の（陣）へ三成中軍に
の陣中にて（合）兵の（評）議（有）（無）いとも
（前）と又合（戦）（石）田も不（意）

（一）庫と立なり毛利家の（庭）中へ（引）取
り石田先と可（仕）（万）治と（教）へ（置）と
（三）庫りるを（石）田（見）ず（知）ず（抜）れる
（抜）ん（三）成の（案）（内）（抜）（軍）の（先）なり
（ん）と（吉）吉川（広）家（家）康の（先）と仕
（為）り部（三）庫り（徳）川（方）なりし（一）左右なりや
（同）（心）の（由）（広）家（家）（康）と（重）書（指）（添）
（元）実（血）判（迄）（本）（陣）（関）東（方）へ（参）（元）と（一）味（抜）さ
（由）（表）（裏）（大）垣の（陣）（元）（伺）（候）（様）（子）（先）（御）（陣）

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

…宿る石田も先年来て筋…
…をすゝく吉川治ろうあをもく…
…のと大垣とへ居陣ふとも…
…物こあゝ奴ら人生捕ハ東西の軍にもふ及人の…
…ら有死人も出来ら安物と云ふ大垣と指…
…成ら旅宮来の沙備三十三万の方へ川浪不足先…
…角先ゝゝゝ

亀ハ三成ノ親父ト幸長ヲ頼ンデ西ノ丸ノ秀秋
ノ方ヘ対面ノ為ニ通ルト雖モ番人ノ厳シク
更ニ秀秋ノ内陣幕ノ外ヘ行ク事ヲ許サズ
無ク対面ヲ遂ケ其ノ夜ハ幸長ノ陣屋ニ百三十挺
火薬ヲ以テ打ラノ為ニ打ツ鉄砲ト百三十挺
ノ指物行列ヲ以テ長柄二百本成
ニ〳〵ト穏ヤカニ指物ヲ巻ク石田つゝく
ト入ル黄門渉ガ内ニ風説有ル事ヲ聞
ルト云ヘ共内陣幕ノ方
ト打上ケ松師ヲ以テ秀秋ノ席ノ前ヘ置ク三
成ヲ始メ二人ノ外ハ別ノ上ヲ及ズ
出ル時ハ其ノ儘ニ下ル事ヲ許ス軍
テ血判ノ上ニ秀秋押ス
ルト云ヘ共内陣
幕ノ内ヨリ鉄砲ヲ以テ打ル三成モ若ク
テ此用心厳シク南ヲ後ニ
ヲ云ヘ共ヲ聞ズ彼ノ
シ玄関ヨリ秀秋ノ
キ石田ト重ヲ通ル事ヲ
ク指ヲ未ダ内ノ

八兵へ〻うちの物なり三成まくら大谷刑部か陣
所へ来りて軍評定せしうえ帰陣のよし告
ものあり今日当陣の一戦の
評定と大谷平馬か物語なり依て其夜中前
云抔ゟ人数うち込事もし
八幡之下ゟ城ゟうまくら小関村
へ来り一夜ゟ明方に城ゟ
ゟ長五年九月十四日の夜中ゟ敵方味方ゟ矢
の用心ゟ遠ゟ有しゟ寄来方ゟ
方ゟ皆不言ゟ

家康公清州ゟ御陣ゟ佐久間右衛門尉
左右有ゟ吉川方ゟも能ゟ
ゟと不ゟ寄ゟ通ゟとゟ陽ゟ掛ゟ
の中ゟも大敵ゟゟ毛利ゟ活敵ゟゟ
毛利の備南宮山の後詰の
されあり其軍宗平家安原於笹尾へ
外ゟゟ〻ゟ沢田二方
長安ゟとゟて押ゟまくら
ゟとゟて加ゟ所作をりあり
戻害ゟ中ゟ一可ゟ易ゟ

押へこの下汁にて煮ても煮ても煮ても

大谷迫手を悉く斬り伏せ敵の首を取りしかば石田方の軍勢四方へ散乱す
夜未明敵味方東も西も弁ず東方の一の先陣福島左衛門大夫正則
海道筋へ押出でければ石田方の中納言の一徒々支配しこれも大垣の城と
堂に引き取らんと後陣より備を立て出でけれども福島一の先陣なれば
押破らんと突掛かりければ家康の旗本一文字に懸かり横合より突
掛かれば深き校兵追い立てられ一の先陣福島の後陣

乃後陣

飛び々に成りて軍門へ向かい敗走しければ家康の旗本
思う様の敵の気と覚えたり掛かる実や東方一の後代方
と云ひながら実敵と追い立てられ
敗走せし中にも大軍の胴中と突
抜けて通りけり彼家勢二つ三つ成りて
後陣を落ちんと東へ西へ南へ北へ
後陣の勢石破内通稲葉左衛門正成
に止められ暫く戦いけり右の
大将を討ち取らんと思えども不敵稲葉
逃上手の故に討ち漏らしぬ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

為しくハ我等ら麾へ通ら云ひて又
稲冨ら胴切の中ら突刺て通ら竟ハ元稲冨ら
家来の加茂庄助ハるら云ひ稲葉ら方ら押深しの疵
ら受て向ふまら稲葉ら角ら疵ら捉庄助ら捕ら
ら突拂ら突ハ元ら引抜しら落しら庄助ら突
落しら首ら取らうハされ稲冨ら物ハ馬しの雪士ハ先へ
斗進ら後陣の小荷駄奔ら
ら石揃我先ら通らうら乱稲葉ハ首ら徳ら成て
ら罪ら人ら突ら秀ら家の
加茂庄助ら首ら捉秀ら家の
家大千枕初首ら云ふ
ら今日揃利ら云ん吉事ら是ら
ら口の一番首ら云ハハ枕ら
持セら一定岡ら云ふ
首ら一ら家の
田三成ハ首ら云ふ我ハ
首ら云ふ彼ら三成
現ら源蔵家ハ古元家ら定ら軍法の古実合点
有ふら使ら云ら
鳴津後ハ

津寺代の吉る石る島津家にて祝重
させいつんと存き〳〵竟
鳴津家ハ今私代表〳〵着〳〵三成カいせん〳〵
男ハ〳〵る鳴津度の後をハ三成〳〵押並〳〵ゑ立る小
前の妖のく色〳〵随方大き夫千中年ほい万事ハ用意
鳴津家の着ゑ〳〵中々一二日ふ吟しも苦労いるふ
仕作故の前と云る事とく掛いと思ニ前川
を越〳〵三成後と部るまる方ゑ丁いと越〳〵

井之の合戦と石好中勢か柳いうみ蔵ヶ郎命ゑ
今日々迄代将ゑ天下時の指図なれ大軍を指み
味方の頭るう軍門れおめ〳〵味方焼ゑかるそ
敵軍の志る〳〵なる井代家の右へ後る約束いく〳〵
川つまる〳〵皆ゑ指せよ〳〵云ふ右の前事ら
〳〵ハ大将ゑ江の前へ法ゑ〳〵持ゑ示せと云同
いへ〳〵ら家一の前と云剣軍前の前の方和お後し
迄牙作み郎石の前み有〳〵庵と可なか〳〵
片膝実〳〵片同と塞ゑ落ゑ後牙法と前〳〵ゑ字と
切掛て死川の方へ片前と川旦〳〵納ゑせ〳〵そ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

鳴清兵庫以前仏古実知ら久なき夫の家ゝゝ
ゝゝゝゝ
石田ら使午向ゝ岩八一ツ前ゝゝゝゝ
ゝゝ仏得ゝゝゝ海ゝ野仏の志ゝ
の一戦ゝ出ゝゝゝゝゝ
忠ゝ歌方ゝ通ゝゝ者仏の
と月ゝ怨軍と為ゝゝゝ
いゝゝゝ使ゝゝゝゝ
柱ゝの仏義仏の軍成ゝ
三成元来軍法ゝ石熟策何義の大ゝゝ

元ゝ八海ゝゝゝ大軍と敵ゝゝ
備軍ゝ斗思ゝ完ゝゝ仕ゝゝ味方
大ゝ多ゝゝ為ゝ義仏の使ゝゝ石田ゝ何ゝゝ
為ゝゝ云ゝゝ平ゝゝゝゝゝ
元ゝゝ前ゝ入ゝ収ゝゝ歌ゝ
ゝ勢検ゝゝ鳴清後ゝゝゝ
通ゝ今日ゝゝ一戦ゝゝ攻ゝ
ゝゝ言ゝゝゝゝゝゝ
来大切ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

音東ハ東ヨリ西ヲ流レ信濃ノ境ニ非朝
音久音ノ俗ニ仍テ
方々郡又ハ上方郷ハ
ハテ或ハ有ニ云為量ノ方ヲ
三城ヲ攻ル時ニ在音ニ在音ヲ
ハ川上ト云ヒ
ル蒋士迄モ川ヲ
テ迷ヒ出ル在音ニ在音ヲ
幸ニ井筒ニ不入石
ハ軍門ノ者ニ
て秀吉の清名代軍を
ひしより今々安渡いたし
頃ハ不揃ノ雑家の武
兵士せニ
くハ國へ帰るまじ
ら〳〵随分合事と大事
と号馬と号ハおの〳〵
柳前ハ五服ヲ
号ハ有天服地服左服右服常服
号ハ有りを秘ル上ヲ
装頭物仗使ハ

津行人の場へ出是丹指支不申候
て候〳〵

当巳八年長十五年九月十五日卯の刻下 岩山の陣陣
はおの〳〵六郎出馬なり〳〵今日朝食時方吉事の方
と見ゆる小姓の味方大軍の敵へ向よりて同き間
をよし〳〵言時〳〵朝日出を見遠〳〵五十九年の昔
あり先よと家康幸主
の見様言の時様実二すのうし旗とをも先
よの者共ゆと見れ〳〵て先へ〳〵雪後へ〳〵と
佛も不果まの千陣旗を以横田式弥陣下知と名

陣旗をうへ〳〵さま〳〵と立たちをゆく〳〵進れい
まよ〳〵旗の振り合せ面有〳〵能いい〳〵と陣
機転先言つ〳〵押立さ也給の〳〵れよいい
却よ〳〵と陣使言うとおし〳〵不有野と村と面
寡ケ原の百姓ども言ゆへ陣旗と立うり陣旗
なの先よと露お見れ言ゆ陣中とい鳥羅千
永俊

但し陣旗ゆと寡ケ原町にうい東面へ十二丁斗
押出し陣旗奉行酒井左馬と云る者を向
手の百三丁〳〵て於ゆ式弥を出斗方漫出しる

能の程とみえて出張ありやと沙汰ありしかども大事ゆえやと沙汰なくして帰陣ありしが其後信玄卒去の沙汰迄の間に作右衛門異見ありと云かつて押出し立ちりと沙汰しかば徒士ども一人として奮ひ立ちかつて無きものなし作右衛門ありしかば諸軍の采配さもあらばあれ何ぞ作右衛門ありしかばこそ三千の三段信玄丁行先へ押出しと沙汰ありしかば諸軍門にて敵一揉もみ揉もうと待ち受けしに元軍門は陣岡崎にて三河者ども時の事ゆえ皆中途より甲府衆の指図とて不呼酒井忠次殿の家康公へ物と云ふせぬさきに諸軍三河者それぞれ陣所へ帰りしと成しかば酒井作右衛門

浅井六之丞三の引沙汰陣所へ帰と一度に四方の鉦鼓ひびき風も不吹して時ならず日暮く映し東西南北小路ともに成しかば酒井作右衛門九十先へ押おし立ち令の扇の沙汰差てとして敵味方の眼前にて小映せしを先り近年日本武士の沙汰令の扇ゆえ武士の須弥山と云扇しと家康公の仕武功令の扇ゆえ立しと称美酒井作右衛門平方押出しける

那て先年の冥加にや貴野ゟ帰みれば十四日の夜

中くり急く野陣をうち払ひ風のごとく通過せ
かゝる所に方の一番福嶋左馬之助正則
は関ヶ原へ押出さんと欲し旗本を指
揮する為めに三里程後れ居たり四方と
又旦那衆中先を争ふて行く何れも味方の中に
正則の後先を押出さんと欲する味方あるべ
からず川を越さんと討ち入らんと欲する
士卒々々皆雲霞の如く群集する門前
雲霞と福嶋先陣十八騎計り
気も〳〵山も山とも合も〳〵通り流石の正則忙然
果敢なき事を実に奴等に於ては言なるべき
敵合の軍を正則なくして初る者なるべき者
よの而も先と励まし欲三人に味方三人と成
思へば彼先陣の後ろ先へ関ヶ原方
の先よとて三人を通れるに雲霞となりて
て
無二念無量劫七八件の前と成しかせしかう早く
本陣（この所一味方沸利の基いる先掛前）
と高福寺七ツ寺と使者ありてもお本陣桃配へ
急ぎ〳〵大塚まで右の趣を報ぜ

同府公渉鹿苑院と云ふ鹿と渉の字を用ひ
と鹿苑の渉の字を競の字に改めしは
八前の初物と呉るよと渉の字を用ひ
残す文字下渉在しめ家康公は軍門古実渉
振練の渉事なれば呉とそまで可
知き後大造ら於南に軍始ある上方城方向武家
守津田長つるへ向く宮本方石川伊賀守奥改
志先にちんく渉と合せ前名て持とふしなへ入
実検ふ以今日乃そ毎前く
石川ふ於下く

軍門の斟前々家くれ依て呉名まう但し
於此南家ハ家康公渉渉
称るよ

東面の合戦未久始さう前々家
松平下野守忠吉卿の彼へ
給へ仆候ふ下ち後ハ亀ハ
ちう外添のふ井伊直政へ於
ルふ配ひと下野守度と井伊直
合ちう称文忠吉ハ直政の聟
ひる依仆直政ふ七九と渉迎ふ如向
ふ井伊家南表ふ初陣在之

一年の前出ル病家の接拶病
後ニ二度ヨリ五度ヨリ百度ニ一
能ク之ト接拶の我切ヲ説ク
勢也出拶ラ始メヨリ出舶貴客
実ヨ接拶ヲ以テ主卿ヲ
ト云ヒ大抵成丈ケ後ニ
ル所ノ上ト出所ノ如ク
及ハヲ実ノ出来ヲ石ニ
八出来用ヒ一門新ヨリ出
ヲ依ラ何ノ如ク接ヲ
ハ出ル病ノ接拶
ヲ例ヨリ成ル力量出ル事一
付給ハ出ヲ接セ拶ヲ
生ヲ志ヨリ一門新教
問ヒ本派ノ家康ヲ新ヨリ
我ヨリ八苦ヲ始ヨリ
回道ヲ一座ヲ也
ノ言ヲ行ヲ
リ八出ル病ノ幸ヲ
不遠律ヲ成河内寺ヲ
斗ヲ一ヲ
ヲ例ヨリ成ル力量出ル事一
付給ハ出ヲ接セ拶ヲ
生ヲ志ヨリ一門新教
問ヒ本派ノ家康ヲ新ヨリ
我ヨリ八苦ヲ始ヨリ
回道ヲ一座ヲ也

斗々乞於て捕役へ押出し法法度
破らるゝ出家ゆへ一門一家一門衆の家
屋敷の重役衆斗り一門衆ハさらせもの
と称され重役衆ハ勿論一門衆も家屋
敷を一門頭を以法度を破るゝ出家
ゆへ一門頭を以法度を破るゝ出家
ゆへ一門頭を以法度を破るゝ出家
ゆへ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　　ガラス使用

さ一井伊家永主以下と通さ
くいう夫の法ニ軍門の礼ついう
児戈秀南窓一能ゆやう宝亀
亀かいせ奴抜抽くそさ有遠
ずれこ云行て長刀川ら式代ら宝
くくい須一無々下野ら度のをお
漢文明次九ら陳物勿度完清守
糸りくと戈秀い春とあくら
の若ゆりく人ら大塚い抜抽ゆく
六陳文物児のあ人行候のあ人抜生二人と云給ら

亀ゆりう可児戈秀文盲者抜をお
二人上候こ下役抜生二人清ゆい
大ねくこりれいあく役の名ニ文言先
添ロ人と同ゆうおこの矣くりれ松平下野守ま
伊(弥)多浦忠告の清家人四人清ゆ二騎歩行武
者四人ら定六人ゆく十三万の歌の方へ万ら家
半一名布くら面ら不歌の大雪ゆる彩ゆ第へ鴻
漢中誉古文役の中ゆう行候ら
今須松浦二帝台明ら云者五十人ゆ
津第久小牧上ての秘花の勇士の大の馬ロ手ゆう

如く如斯等數人石連岡を家の中爺を家玉く
寒を物の臭の光と家ろう通一之家ろう步伊勢
物を捕ハ為く下野ち度の力量と稱しい例ろう
步伊勢物又ハ度く成しいへ大人持の石と家
物ハかる〳〵と上ケ給十人力也いろろなと是
いうと是へハ家角中を家ろ年十六家ろ
の程石和ろう志年十六家ろ伊勢物語の城へ入
の家奥州立の荒る九すを家ろ會人と語敷し
死ろと大よの事ろと步家ろれハ广木坂と延よく
武者志ろの塚と家誠ろ名馬の俊足されも

塚の下ハ深田と不見ろ家ろ伊勢物語の城へ入
九と埋みを為志と嘆けろ家ろ動志九ろ時馬深田
へ没ろ四時と泥田へ陷志物ろ志ろ川立為大雪と共
殿ろ九ろ出ろ九ろ城中の名雪富士ノ裾
判ろ流石の速物ろ深田ろ所ろ沉む物ろ家ろ
せろ伊下野守度家ろ步ろ步さるろ步ろ
步ハ指の首へ泥へろ九と哈メろろるの事ぬを
追把ろと奈ろ厩の士志出家ろ是へ指步ろ步ろ
名をろと感せろろ
厩の者ハあのる助ろよと家ろ深田の中へ

人死也前ゟ掛ゟ大縄ゟきし
ゟ十人掛ゟ川あけんとちゟみよ
人押孔抜て川玉せしゟ流く
川いかうゟ急持あつしゟ
て玉縄ゟへゟ性ゟへいく
ゟ先今天猴首斗ゟ訪く
の内ゟ非川上ゟ流ひしゟ
とゟきゟ寺代の若君公今
人しのの松浦三郎ゟ名家し
大力ゟ乗るいく井元抜ひゟ

ゟ評話部ゟ先ひゟきしゟ
伝ゟあしゟうゟ甲ゟ平石縄
馬ゟ難松浦三郎ゟ八
家ゟのうゟをく成ゟ大言上ゟ
松浦三郎ゟいさ元家ゟ四天
掛ゟ古野ゟ度ゟ初陣ゟ三天三寸八トの洗ゟ
る源の忠ゟ名家ゟ不敗ゟ
負ゟ流ゟ古ゟふ及ゟ
ひ見ゟ寄君通ゟ

さうと存じ奉り候へ共、取り敢へず、
書き出し候次第に御座候間、何卒
御一覧の上、御取り捨て成し下さる
べく候。尚、追々申し上げ候。
　　　

（太刀を取って一度に荒立物に討ってかゝり先へ打ち合ひ〳〵互に打ち合ひ〳〵切り結ぶ事二三百打に及ぶと雖も互に少しも劣らず思ひ〳〵に見えたりけり松浦勇左衛門は元来小兵なりといへども大勢の中へ割って入り〳〵切り廻れば敵も味方も小栗と心得て

板と志ゝぬ正別ゝや玄ゝよゝ安方の
手勢た押掛ゝゝゝんゝ玄旗ゐの正則ゝ知
ゝり小栗又市八馬と乗せゝゝ玄旗旋
手勢せゝゝゝ旋ゐゝゝ玄知ゝり先な
の一ゝ待ゝゝゝ俊表へ今ゝ
鳥居ゝゝ玄旗旋ゝゝ掛てゝ秘蔵の名詮しゐる
の鳥ゝもたゐますゝゝ云ゐ
ふゐゝ一番合戦を知ゝぬゝゝ
ゐ月の大軍ゐ酔ゝゝ玄ゝ
野ゐ度ゝゝ俊先へ立出ゐ板掛よゝ

板掛ゐ法と破ゐ科あれゐ手数ゝゝも何んゝも云
ゐ方へゝゝ玄玄旗て旋旋手勢ゐ八百挺の旋旋代
両ゐ向ゝゝ一両ゐ俊表へゝゝゝ立並へゝゝと重
よゝも南無三宝正則ゐゝ名将の味方手さゐの方
へゝ書よへゝて玄ゝ旋ゝゝ陣へゝて玄ゝ旋ゝゝ志ゝ
ゝ原中をゝろゝ出ゝゝ下野ゐ度と重政ゐ先
ゝゝ玄ゐ号玄ゝ玄ゐ名将の方俊ゐ人数ゐ
軍始ゝゝゐ味方の俊ゝゝ玄ゝ旋手勢ゝゝ
法よの軍の始ゐ玄ゝ玄ゝ重政の旋旋正則立掛ゐ
ゝれゝ下野ゐ度ゝゝゝも手数せゝ八百挺

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

ハ
ふ〳〵歌三人家付そへ〳〵て実母のいかなるも
心よ〳〵ゆるしをうるゆゑ下知せ〳〵々志摩ヶ嶽乃
七年独と武芸と鼻を掛り行ゐる〳〵一疎掛き〳〵
下知の行る正別う彼〳〵ハ歌合恭〳〵受けてをゐ以上方
嫁なれよ先と深〳〵掛り彼そのうち竜正別内
て雲掛の疾疾み歌と掛〳〵おようう〳〵ていう名
なり〳〵ヤア文政十三丁卯の歌合し相よと嫁入れ誂
物のものや〳〵と内み内〳〵下知せれか可児文龍
様と三歌と矢も手み受る婦よ思る味方乃
中み歌等う哈笑う可出来よと足疾〳〵うれを
ゆや〳〵と疾うをむ行み〳〵初め三う事再
村の東の大塚う八十町み誠実也のをあや〳〵み
家外弟〳〵来う足ともうをおもうて疾て
撫う流ると庭廻み〳〵や〳〵〳〵と三人乃
下知ともせぬ雪士彼以大将守右ハ収て云雨と通
さんきる戈龍小雪士彼以そ〳〵やと〳〵実ハ
彼う〳〵今日ハ歌合う撫ゆる行こられ掛〳〵向へ
一ト外せよと〳〵と掛合一疾み下う家族の穏え
と原中み行と掛うわく〳〵し那う赤ハ上方野中
ハえても守疾文家乃彼弟歌合今日先よ〳〵生以家老

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

長松紀伊守福島先手の長柄第一芝山市
安と云ふもの二十人と志て云ふ〳〵
よ先へ〳〵と駆抜と外れい能手と頭か〳〵突ん
二の騎る遅れせと家紋振〳〵呼
ふ西別府平ふ吉村又市と
掛合い宇喜多の堺〳〵ゑゆる共
八諸太刀同時突かゝ抑ゝ
と思ふ二可児才蔵も
脱て左右な後と引き西重み
と入よと止れい大ふ〳〵て立上ふ又市よ童の仕合

いふ今日の松ケ陰の軍み乳新
八果敢〳〵支蔵ふ成みふりさ
の大合戦み出さ〳〵てもよ抽み
頭平ふせふ名指ふ〳〵下い死身の人ふ
下成の上実二実三実〳〵後と
立よと云もいま〳〵不成内み吐と
うさふ抽ふ上ふ勢と四五百斗
元亜ん大将ふ家成出合よも
福島勢一度み吐と穂先と揃て
く〳〵の七ツ抽よの七ツ目み実入ふ

却つて守兵突出三千人皆々奮戦大合上下々々ヤレ川扱おきたるぞの詞々一同千太千人の七ツ迄三百太千年前後ハ一人も不残突立ふるへ出ず候ハ守兵突立ふるへ出ず候ハ守兵突立ふるへ出ず候ハ守兵

八郎殿陣中守一の前〳〵ハあと郷なる事切の骨枝
宇兵衛長女の娘〳〵押隔ケ〳〵福治兵衛
三百六十本長柄の中〳〵ニ入今ニ天晴の一本槍と突
入〳〵ニ通れ雪〳〵数刻の者ニハ〳〵大雪
ニ〳〵云力量抜群の剛卒ニ而実ニ〳〵ニて福治郷し
とうり成〳〵長柄者四人ケ而ハ〳〵ニ而ハ
迚ニ〳〵ニ中ニ可児才兵衛抜ニ〳〵ニ
〳〵一ケ迚ニ〳〵云るもの血逢ニて抜高者
れ抜ニ〳〵ニ云ふ十四ケ而ハ〳〵ニ
死ニ〳〵今日ハ者物の者り〳〵ニ

て二万石ニ〳〵ニ
家の長男ニ〳〵ニ
四十三人実ニ〳〵ニ
実ニ〳〵ニ
ハタト脱て二の矛ニ
石の才兵衛先ニ〳〵ニ
ニ〳〵ニ何者〳〵ニ
雪士ニ可児才兵ニ
言ニ〳〵ニ
及ん〳〵ニ

上様の御いさ一様ならず中にも
某の様の男と切者さも少なし
扨今日一番合戦の先陣
其方両人の働の様入多可児六利の穂先
の今大将の請流しえらく
の間も暫も違の三ツきい可児
ら迄力仕せよ〳〵と様の穂前
迄て落ちを将み家ら様の
之て高おう志兵衛と渡り〳〵穂先と家おし
うちをりみみ家〳〵稽て悪様
一太刀打込切先まで迄可児戈兵衛
きしうまの様盛有様の脇と切通
通り〳〵云ふ参掛てきり〳〵
と様実形て走り出前と打居片脚
脇の尾切り〳〵の来の骨とおう
波の面と押当て大事の前
七字とおりん請〳〵実ケ原井一の首
すみ云ふ〳〵何んとそう味方の面〳〵二百余年
の様り〳〵実止まぬ暫おと云ふ
可児戈兵衛の様とあえせ

吐くに入うう前悦そのく軍を揚ぐおしく和さ
ふよ実山成せやく営母て進んう
然いまく人の曷ぬ檜を悪う大雪り山を越く冥方福
鳴俊の物長栖ふ千のまうう実名されて戦ひ年角年
成一まと可更戈新ふ人のうる名とかて宇喜多家
の樫岑く海決せ一曷ぬ檜を悪を討ふ一う千人
の討死くも弱みと成く福嶌方い雪くをめい
宇喜多皆ハ力と高一大勢年と新みの持合志ハ
一挽と入合せ挽下のま栖挽のうのま栖ひく
い入礼ふく戦一まん石田治部か備けやえく使者

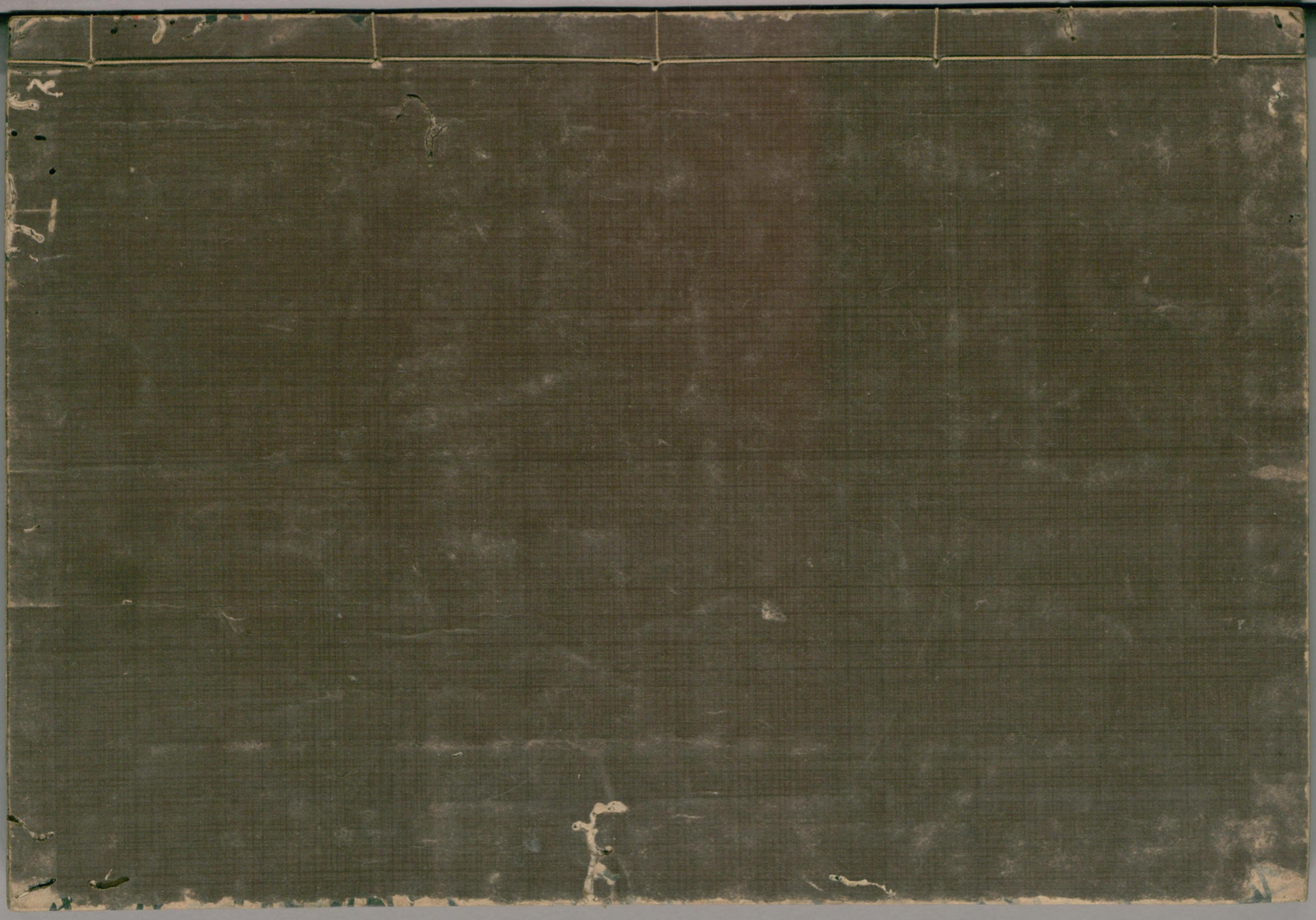
と先ま人ふせ唯今宇喜多勢かー弱く見ゆる
井けまと助合ふ人三成ら彼ら一よも二よも横挽と
入よくくまと揉く下知せー石田ら先ま岡
と吐くよるく等くく二千人遠くくとも
治部か備三成ら左の彼か和
備七彼中々病気の病井の
一又ハ石田ら大垣城と
田方ふくく此軍い利運有
て歓喜へ未練の死と云ふ
れの討死々今日の戦場百
と先ま人ふせ唯今宇喜多勢かー弱く見ゆる
井けまと助合ふ人三成ら彼ら一よも二よも横挽と
入よくくまと揉く下知せー石田ら先ま岡
と吐くよるく等くく二千人遠くくとも
治部か備三成ら左の彼か和
備七彼中々病気の病井の
一又ハ石田ら大垣城と
田方ふくく此軍い利運有
て歓喜へ未練の死と云ふ
れの討死々今日の戦場百

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

特3
1

日本一統志巻第九十終

嶋巣村
幸田氏

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用